廃藩置県の歴史的意義

- 日本を封建国家、地方分権国家から中央集権統一国家（近代天皇制）へと転換させることになった。
- 薩摩藩という廃藩置県に大反対の藩をバックしていた西郷。参議になると、廃藩置県に積極的な賛意を示す。議論が紛糾した時も「反対する藩は潰す」との西郷のひと言で、まとまる。
- 幕藩体制の崩壊過程

1867年12月：王政復古の大号令（徳川幕府滅亡）

1869年6月：版籍奉還

1871年7月：廃藩置県

3. 波乱にみちた人生(5)

◆下野:明治6年の政変で参議を辞職し、鹿児島に帰る。

- 1873年10月、閣議決定されていた西郷の朝鮮使節派遣が岩倉・大久保など外遊派の策謀により覆される。参議を辞職し、鹿児島へ帰る。

＊この事件の本質:留守派と外遊派の権力闘争。

- ◆死去:城山にて死去。
- 1877年2月ー9月　西南戦争に敗れ、城山にて死去(満49年9か月の生涯だった)

補足：明治6年の政変（征韓論秘話）

・【明治6年の政変】を教科書では【征韓論】と呼び、西郷を征韓論者と決めつけている。

『もういちど読む山川日本史』の記述

「朝鮮に開国を迫り、これが拒否されると、西郷隆盛・板垣退助らは、武力を用いてでも朝鮮を開国させようと征韓論をとなえた」

・板垣退助＝強硬な征韓論者

・西郷隆盛の主張：「武力で開国を迫ることには反対。誠意をもって朝鮮を説得し、平和的に開国させ、国交樹立を目指す。交渉の使節として、自分を全権大使として派遣して欲しい」。

＊木戸孝允も明治のはじめ、征韓論を唱えていた。

補足：征韓論秘話（2）

外遊派（岩倉使節団）が不在の約2年間に、近代化へ向けて行われた改革。

- 地租改正の布告（明治5年7月）
- 学制の頒布（明治5年8月）
- 新橋ー横浜間の鉄道開業（明治5年9月）
- 国立銀行条例の公布（明治5年11月）
- 太陽暦の採用（明治5年12月）
- 徴兵令の発布（明治6年1月）

外遊派の思惑：

「留守派の西郷に外交でポイントを重ねられると、自分たちの居場所がなくなる。西郷の朝鮮派遣は断固阻止すべきである」→卑劣な手を使って、決議を覆す

西郷と西南戦争

- 明治9年10月に不平士族の反乱が相次ぐ。
  10月24日　神風連の乱、10月27日　秋月の乱、
  10月28日　萩の乱
- 西郷にはこれらの動きに同調する意思なし。
- 西南戦争勃発時に西郷が発した言葉
  「政府への尋問の筋これあり」

（国内の不平に耳を傾けず、士族を追い詰め、さらに私学校解体を強行しようとする大久保らの真意につき直接問いただしたい）

↑大久保政権への尋問が本旨であり、武力で対峙し、明治新政府転覆を目指す意思はなかった。

西郷と西南戦争（2）

- 名目的指導者：西郷隆盛
- 「自分は今回の暴挙に賛成しないが、起きてしまったことは致し方ない。出兵と決まった以上、自分の身体は皆に預ける」

西郷の周囲には常に多数の若手兵士がいて、監視されているような状況。総指揮にあたろうともせず、シンボル的存在だが、薩軍における求心力は高かった。

- 積極的推進者：篠原国幹、桐野利秋
  ＊全軍の指揮は桐野が執っていたとされる。
- 軍略なし。軍の統率がとれず、熊本・宮崎・鹿児島を迷走。

西南戦争経過図

2月22日征討軍第1・2旅団
など博多上陸
征討軍警視隊の
進撃路
小倉
筑前
福岡
豊前
久留米
筑後
肥前
大分
佐賀関
豊後
臼杵
佐伯
森崎
丸市尾
長井村
延岡
8/12～14
南関
高瀬
2/25～27
山鹿
隈府
竹田
3/3～20田原坂
2/22～4/14熊本
川尻
長崎
馬見原
可愛岳
8/15～18
御船
矢部
4/12～/20
八代
肥後
仲塔
七ツ山
日向
5/6～6/1
高鍋
8/1～2
水俣
5/11～6/7
人吉
6/19～21
村所
加久藤
阿久根
出水
大口
6/18～20
小林
野尻
宮崎
7/27～31
吉松
横川
蒲生
吉田
都城
7/15～24
鹿児島
9/1～24
薩摩
大隅
西郷軍 vs. 征討軍
4月27日征討軍別働
第1・3旅団博多上陸
征討軍の進撃路
薩摩主力の進撃路
その他の薩摩の進撃路
薩摩主力の退却路
その他の退却路
主な戦場（数字は期間）

西南戦争

- 1877年2月15日ー9月24日（221日間）
- 戦死者：薩摩軍　6，239
  政府軍　6，843
  合計　13，082

・鹿児島市街地の90％強が焼失。

＊武村にあった西郷の自宅も焼失した。

西南戦争の意味・影響

- 士族による政府への抵抗運動が打破されたため、封建制度を廃止して郡県制を樹立しようとした廃藩置県で目指した方向性が確立した。

→西郷が大義なき戦いに身を委ねた真意は、不平士族による反乱を終わらせ、新政府による中央集権体制の確立を図ることにあったのではないか。

- 戦争で勝利を収めたことで、政府内における大久保の地位が確固たるものになり、大久保政権による富国策（急進的な工業化）の推進に拍車がかかった。

4. 主な功績

西郷は幕末の革命家であるとともに政治家であり、陸軍大将を務めた軍人、教育者、思想家など、さまざまな顔を持つ。

- 尊皇倒幕運動の世論が渦巻く中で、薩長など雄藩の力を結集して、260年以上続いた徳川幕藩体制を終わらせる。【革命家】
- 新政府の参議として、最も困難な廃藩置県を断行、兵制を確立するなど新政府の地盤固めをするなど、幕末から明治へかけて新体制づくりに貢献した。【政治家】

4. 主な功績（明治維新）

- 海音寺潮五郎（『西郷と大久保と久光』）

「明治維新という革命は、西郷の徳望と大久保の腹黒い策術で成功した」

- 内村鑑三（『代表的日本人』）

「維新は西郷の維新だった。もちろん木戸、大久保、三条、岩倉もいたが、西郷がいなければ維新の成功はなかった」

4. 主な功績（軍人として）

【軍人】

- 禁門の変で薩摩軍を率いて、長州軍を撃退
- 戊辰戦争では司令官として新政府軍（官軍）を率いて、勝利に導く。

4. 主な功績（教育者・思想家として）

- 郷中教育で二才頭を務めるなど後進の指導に従事。流島生活時代は島民の子弟の教育を行う。晩年は鹿児島に私学校設立を設立し、将兵の教育に従事。【教育者】
- 庄内藩からの要望により、藩主・家老・藩士たちに、人生・政治・文明・教育などにつき語る。後に庄内藩より『南洲翁遺訓』として出版される。【思想家】

５．西郷隆盛を語るキーワード（人物像と魅力）

ａ．人物像

- 巨眼・巨躯

　身体が大きく、黒ダイヤのように輝き、慈愛とうるおいが漂う大きな眼をしていた。

- 笑顔、愛嬌

　肥大な身体と鋭く光る巨眼により、威厳があったが、ひとたび打ち解けると、愛嬌のある柔和な笑顔で、相手の心をとろけさす人物だった。

西郷隆盛肖像画（作：佐藤均、尚古集成館蔵）

西郷隆盛肖像画（エドアルド・キヨソネ作：、明治16年（1883年）制作

キソヨネの肖像画は合成

上半分は弟の西郷従道

下半分は従弟の大山巌

西郷＝巨躯・愛嬌

- 渋沢栄一が語る西郷のイメージ

「大西郷は体格のよい肥った方で、平常はいかにも愛嬌のある、いたって人好きのする、柔和な容貌で、やさし味が溢れておったが、一度意を決しられた時の容貌はちょうどそれの真反対で、あたかも獅子の如く、計り知れぬほどの威厳を備えておられた」

西郷＝巨躯・巨眼・愛嬌

- アーネスト・サトウ（英国公使館勤務）評

「筋骨たくましい巨大な人」と表現し、

「黒ダイヤのように光る大きな目をしていた。

　たまたま口を開くと、何ともいえぬ愛嬌がこぼれ、親しみがあった」

（『一外交官の見た明治維新』）

５．西郷隆盛を語るキーワード

- 無欲無私（命もいらず、名もいらず、官位も金もいらない人）

＊昇進の辞令や褒賞の申し出をたびたび辞退。栄転に伴う堅苦しい生き方や周りの妬みを警戒したため。

- 至誠一貫の精神

誠心誠意をもって、こざかしい策を弄せず、相手を信頼して上下の区別をせず、「敬天愛人」を信条として公明正大に対処した。相手との立場の違い（地位の高低等）によって、態度を変えることはなかった。